

町民文芸



只見短歌会

九月詠草

大塚栄一 指導

小倉キミ子

夕立に一葉一葉と打たれたるさるとりいばら波をうちをり

古川 英子

亡き母が世話せし生家の鶏舎より産卵の声聞こえ涙す

関谷登美子

薬品に張りつきし鼠逃れむと動きてゐるに視線をそらす

渡部ゆき子

枝豆を取り来て挽げば花の頃雨なき猛暑に秕の多き

五十嵐夏美

三十五度越すわが庭に落水の音を響かす娘婿はも

目黒 富子

膝を病む友草取ると地に座り土が暑しと顔を歪める

馬場 八智

三か月も炎天続き鶏頭の花はひと際くれなる深し

渡部ヨリ子

登校の児童の鞆に熊除けの鈴の音響くを居間にゐて聞く

新国 洋子

おほかたは娘にゆだね弛き身をベッドに過ごすひと日の長し

(出 詠 順)

只見俳句会

十月例会

目黒十一 指導

リウコ

菊の花咲くまで庭はひと休み

一夜明け漆紅葉の背戸の山

笑 羊

朝霧のゆっくり上り鬼ヶ面

峠路や邯鄲の声覗かれて

都

秋日の家路へ急ぐ駒止道

仏壇の友の遺影や薫る菊

一 穂

村役の蹠るゝ縄や秋祭

献穀米刈る子供らへ秋茜

敦 子

萩の穂の風にゆれいる六十里越

邯鄲や線路を越える茂みにも

礼

秋天や動きを見せぬ田子倉湖

秋気澄む高みに祀る村社

一 灯

秋祭人に肩借し鳥居まで

落石の音からからと山の秋

又壺歩

拍手やとどけ出雲へ神の留守

ダム跡の砂乾きいる暮れの秋

恒 夫

秋夕焼街道沿えの軒底く

百姓の百の一つや落穂捨う

邦 男

薄紅葉峠に向う救急車

只見ダム真下におきて薄紅葉

吉 児

湖守る田子倉神社ちちろ鳴く

行合の空や新秋只見富士

隆 堂

会釈さる毛糸帽子に憶いなし

打ち明けてわだかまり解け天高し

邦 夫

九十八才吟行楽し秋うらら

あでやかに山粧いし水鏡

康 女

秋麗たしかに老いてゆく身かな

紅葉山茅葺屋根のそば処